のらしく、因に常盤神社の祭神は天照皇大神であった。

4．おわりに

前項で概述したように、広く知られている開拓獅子舞のほかに、稲穂の獅子舞、沖揚げ音頭、越前踊り、時和の神楽の４つを摘出した。これらの伝統芸能の多くは、既に伝承者がなく亡んでしまったものもある。しかし、明治期に入植とともにこの地に伝えられてから永々と息づいているものもある。本町にはこのほかにも、本州からもちこまれ、開拓初期のムラを楽しませたものがあるかもしれない。今後も継続して調査を進める所存である。

（浦幌町郷土博物館学芸員）

引　用　文　献

山村照雄（1978）「浦幌町開拓獅子舞（浦幌町無形民俗文化財）」浦幌町郷土博物館報告 11　浦幌

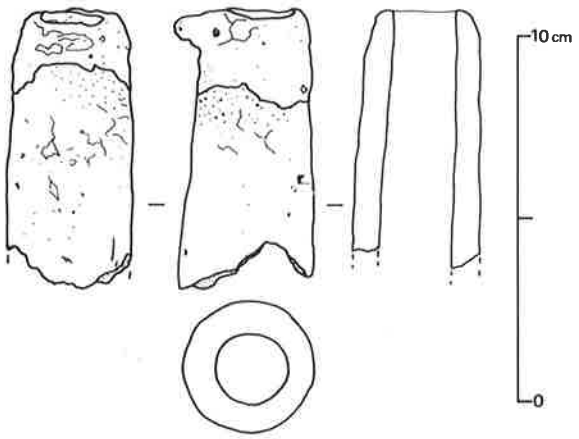
十勝太古川遺跡出土の鞴の羽口

宮　　宏明

本資料は、浦幌町十勝太古川遺跡８号竪穴から出土したものであるが報告書は未刊である。近年の擦文文化に伴う当該遺物の増加による再考気運の昂揚に促され紹介するものであり、擦文文化における「鉄」がどのようなものであったのか、研究の一助になれば幸いである。

鞴の羽口の先端部直径は26㎜、基部側直径は37㎜、長さは(77)㎜で土製である（Fig. １）。羽口の先端部には、図のように熔解した後、固まった鉄が付着している。文様はなく、胴部へゆくにしたがって脹らみを呈する。羽口内部の観察からやや楕円形の棒状のものを芯として、それに粘土をはりつけ静かに真すぐ抜きとったもののようである。色調は、胴部は灰褐色、先端部近くは熱を受け灰白色に変色している。焼成は硬く、羽口先端部では部分的に黒色のガラス化したものも付着している。

８号竪穴（Fig. 2）は第２地点の東端に所在し竪穴の大きさは東西5.3m 、南北５ｍの方形プラ



Ｆｉｇ．１　十勝太古川遺跡出土の鞴の羽口

ＰＬ．１　十勝太古川遺跡出土の鞴の羽口

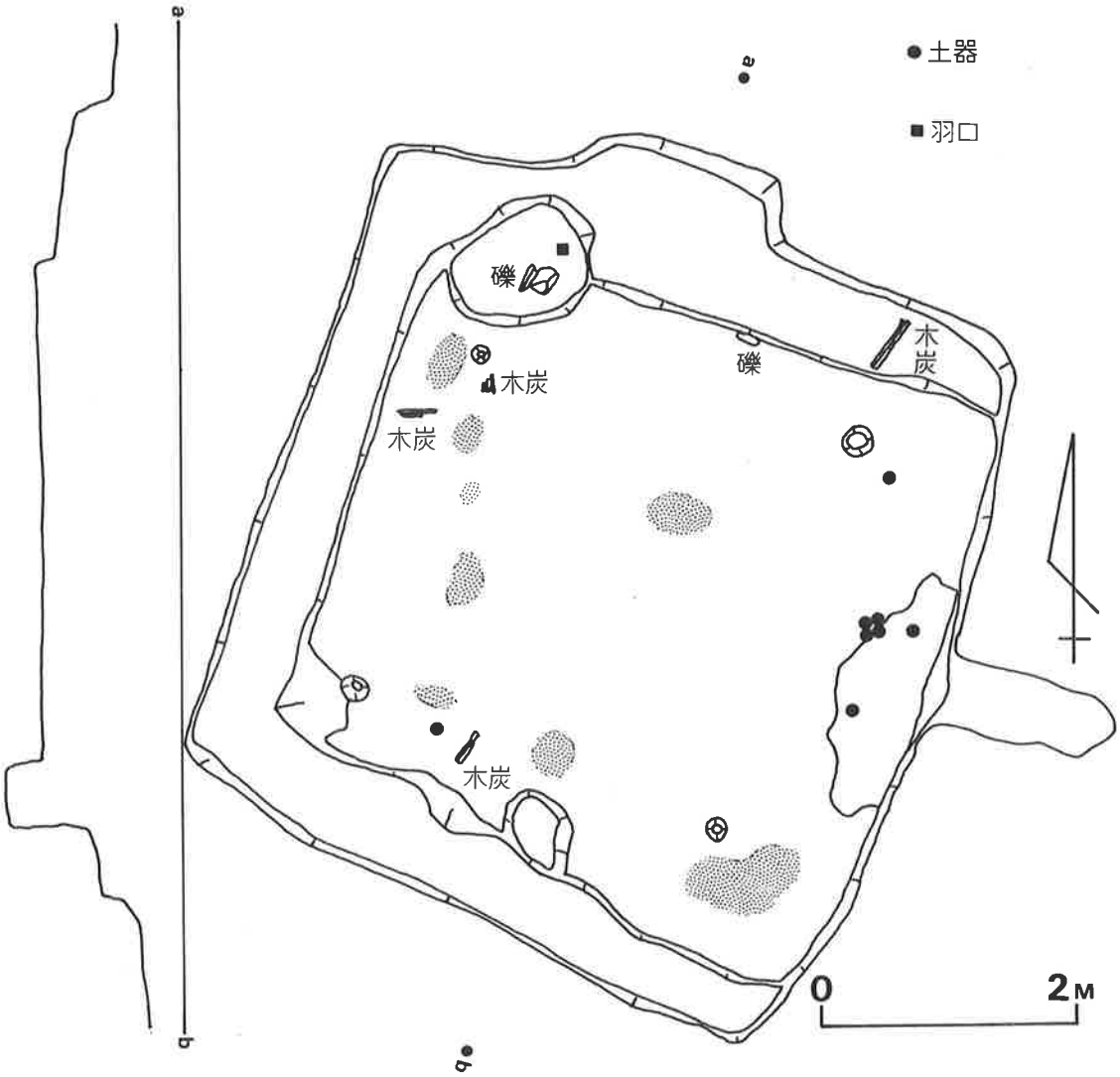


Fig. 2　十勝太古川遺跡8号竪穴

ンを呈し、北壁のほぼ中央部は、幅1.4mに亘ってわずかに外部に膨らんでいる。カマドのある東側を除く、北・西・南壁は二段構えのベンチ状をなしている。住居址床面の中心部からやや北東の位置に長径48cm，短径30cmの楕円状の地床炉が、西壁と南壁寄りの床面には焼土が7カ所、その他北壁のベンチと西壁及び南壁寄りの床面からは木炭がそれぞれ数片づつ認められた。柱穴は四隅にそれぞれ1カ所，計4カ所検出され、概ね10～20cmの径で床面からの深さは概ね20cmであったという（浦幌町教育委員会　1973）。

羽口は北西の隅のベンチに接して所在する長径95cm，短径70cm，深さが床面から7cmのピットから出土した。この浅いピットからはスラグ22片及び円礫2個と焼土・炭化物が伴出している。このような浅いピットは、枝幸町ホロナイポ遺跡（佐

藤隆広　1980・1981）及び千歳市末広遺跡（大谷・田村　1982）で検出されたものと類似している。ホロナイポ遺跡第２地区（Tab.１）では第１号土壙から無文の羽口が２点，第２号土壙から刻線文が描かれるもの３点，第３号土壙でも破片数片が出土した。この他に羽口の出土はなかったものの火床炉と考えて大過なき遺構が数例認められる。報告者が述べているように1980年度調査の５号竪穴住居址内南側に検出された４基のピットも見逃せないものであろう。末広遺跡では浅い皿状の89号土壙から羽口が２点，刀子及び板状の鉄製品・礫等が出土している。十勝太古川遺跡の事例とこれらの浅いピットとの類似性を否定することはできない。住居址内あるいは住居址近くに所在するという違いは、両者の使用された季節的な相違に起因するものかもしれない。今後の類例に注目していかなければならない。

擦文文化に伴う鞴の羽口が出土している遺跡（Tab.１）は、管見の限りでは16遺跡あり、30点あまりに達している。新十津川出土の羽口（高畑宣一　1894）は良好な資料ではあるが、確実に遺構に伴って出土したものか今日知ることができない。したがって前述したように資料が増加したとはいえ遺構に伴う良好な羽口の出土例は、ホロナイポ遺跡，末広遺跡そして十勝太古川遺跡のみである。根室市西月ケ岡遺跡（八幡一郎ほか　1966）出土のものは小破片であり、小平町高砂遺跡（註３），常呂町岐阜第二遺跡（藤本・宇田川・武田　1982），天塩町川口遺跡（註４）出土のものは、いずれも住居址の覆土から出土したものである。その他の斜里町須藤遺跡（金盛・村田・松田　1981），乙部町元和８遺跡（大沼忠春・大沼あさ子　1977），江差町厚沢部川河口遺跡(大沼・佐藤ほか　1976)，小樽市鮠淵遺跡（註2），礼文島香深井Ａ遺跡（大場・大井編　1976・81），北見市南町Ｃ遺跡（宇田川　洋　1981），旭川市錦町５遺跡（註５）のも

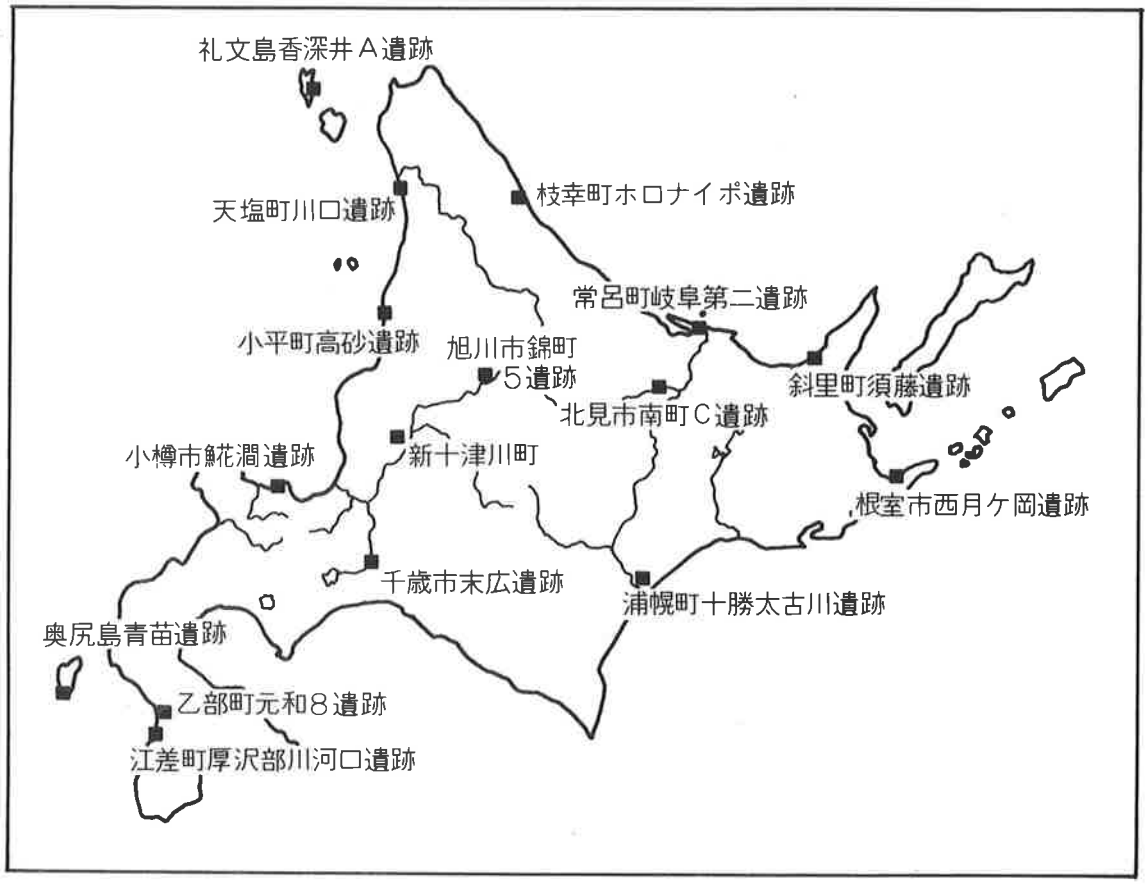


Fig. 3　鞴の羽口を出土した遺跡の分布

遺跡名	文献	図版番号	形状	大きさ	備考
ホロナイポ遺跡第2地区	(佐藤隆広 1980)	Fig.71－1	欠損，無文，胴部へゆくにしたがって脹らみを増す。	(70)mm×(43)mm	1号土壙出土，先端部須恵質に近くコークス質の付着物がみられる直径20mmの貫通孔
		Fig.71－2	欠損，無文，基部付近はゆるやかに外反	(90)mm×(50)mm	1号土壙出土，先端部須恵質に近くコークス質の付着物がみられる直径19mmの貫通孔
		Fig.72－1	欠損，刻線による幾何学文様の周囲に刻点文を施す，基部はゆるやかに外反	(75)mm×(43)mm	2号土壙出土，先端部は須恵質に近く，直径19mmの貫通孔
		Fig.72－2	欠損，基部付近に刻線による幾何学文様が施されている，基部はやや広がっている	(72)mm×(42)mm	2号土壙出土，先端部は須恵質に近く部分的にコークス質の付着物と熔解した鉄がみられる
		Fig.72－3	欠損，器面全体に太い刻線が縦方向に描かれる，基部はやや広がっている。	(70)mm×(42)mm	2号土壙出土，先端部は須恵質に近くコークス質の付着物がみられる
		――	破片，無文	――	3号土壙出土，破片数点が出土，先端部は須恵質に近い
岐阜第二遺跡	(藤本・宇田川武田 1982)	Fig. 3－2	欠損，無文，胴部へゆくにしたがって脹らみを増す。	(82)mm×(54)mm	3号竪穴埋土中出土，直径24～28mmの貫通孔
須藤遺跡	(金盛・村田松田 1981)	第114図-21	破片，無文，筒形	(82)mm	遺構外出土（E－11グリッド），推定直径60mm
		第114図-22	欠損，無文，筒形	(109)mm×(60)mm	遺構外出土（E－11グリッド），直径25mmの貫通孔
		第114図-23	破片，無文，基部の一部分のみが残存。	(116)mm×(95)mm	遺構外出土（E－11グリッド）
西月ケ岡遺跡	(八幡一郎ほか 1966)	――	破片，無文	――	171号竪穴出土，他の竪穴よりも鉄製品等が多くみられる
元和8遺跡	(大沼忠春・大沼あさ子 1977)	――	破片，無文，円筒形，	(70)mm	遺構外出土，推定直径27mm，推定内径は20mm前後の貫通孔
厚沢部川河口遺跡	(大沼・佐藤ほか 1976)	――	破片，無文	――	表面採集資料，半分程度しか残存していない(註.1参照)
青苗遺跡	(桜井清彦 1958)	――	欠損，無文，先端が丸く基部は平な円筒形を呈し縦に半分に割れている。	170mm	表面採集資料，推定直径70～80mm先端部に鉄滓が付着，奥尻中学校蔵
	(菊池徹夫 1979)	図2			
	(佐藤・山田 1978) (佐藤忠雄 1979)	図5－3	完形，無文，椀形鉄滓と伴出，その他数点出土	145mm	製錬址より出土，基部内径85mm，先端部内径25mm，厚さは10mm，本報告に接していないが数点出土したという
鮫湖遺跡	(註2参照)	――	破片，基部に近い胴部破片であり刻線文が施されている	――	筆者による表面採集資料，札幌商科大学人文学部人類学資料室蔵
高砂遺跡	(小平町教育委員会 1981) (註.3参照)	――	完形，無文	――	住居址覆土から出土，報告書近刊
		――	欠損，無文	――	住居址覆土から出土，報告書近刊
川口遺跡	(吉崎昌一 1974) (註.4参照)	p129写真上	欠損，無文，縦に割れている，先端は火熱のためガラス化	――	住居址覆土から出土，札幌大学文化交流研究所蔵
		――	破片，無文	――	住居址の外から出土，小破片，札幌大学文化交流研究所蔵
香深井A遺跡	(大場・大井編 1976・81)	第99図－14	破片，無文	(60)mm×(36)mm	魚骨層Ⅰ出土，基部から胴部にかけての破片，
南町C遺跡	(宇田川洋 1981)	図103－6	破片，矢羽根状の刻線文と横走する刻線文を施している	――	表面採集資料，北見市立博物館蔵
錦町5遺跡	(註.5参照)	――	破片，無文，先端部はガラス状	――	遺構外出土，擦文土器の新しいグループに伴う
			破片，無文，基部破片	――	遺構外出土
新十津川	(高畑宜一 1894)	――	欠損，無文，先端部に熔解した鉄粉が付着している	(175)mm×(98)mm	きわめて大きく擦文文化に伴う羽口としては2番目の大きさである
末広遺跡	(大谷・田村 1982)	Fig.202-1	ほぼ完形，無文，先端から基部に向って太くなり裾を広げるように径が大きくなる	192mm×75mm	89号土壙出土，先端部は高熱のため発泡状態を呈している
		Fig.202-2	欠損，基部には三条の横走沈線が巡っている	95mm	89号土壙出土，全長は200～250mmと推定される

Table　1　鞴の羽口を出土した主な遺跡とその特徴

のは、遺構外あるいは表面採集によるためであるため伴出遺物など明確ではない。ただ奥尻島青苗遺跡（佐藤・山田　1978，佐藤忠雄　1979）の製錬址と報告されている遺構に伴う羽口は特筆すべきものである。小鍛冶程度のものではなかったことを明示していよう。しかし、藤本　強氏も指摘しているように、地理的な特殊性から考えて「かならずしも全道的な擦文文化のなかに一般化することはできない」ということがいえよう。やはり現状では一般的な擦文文化において大鍛冶は、ほとんど行なわれていなかったと考えるべきであろうか。しかし、前述したような鍛冶遺跡が存在することは事実であり、今後の調査例の増加によっては再考の余地が残されている。

羽口に刻線文様が施されている例は、管見の限りではホロナイポ遺跡，鮠澗遺跡，南町C遺跡の３遺跡である。これらは、伴出土器との関係から重要な意味をもつ資料である。新十津川例を除く他の遺跡の出土状況等から勘案して、羽口は比較的後出の擦文土器に伴う事例が多いように思われる。

最後に格別なる御高配を賜った後藤秀彦氏並びに、御教示いただいた大場利夫博士・藤本　強先生・石附喜三男先生・斉藤　傑氏・久保勝範氏・宮塚義人氏・佐藤隆広氏に対して心から感謝申しあげる次第である。　　（北海道考古学会々員）

註

註.1　佐藤隆広氏の御教示によれば、本資料は表面採集で半分程しか残存していないもので文様はない。付近からは擦文土器の比較的新しいグループのものが採集されたという。

註.2　筆者が1980年に表面採集したものである。刻線文が描かれており基部に近い部分の破片であると思われる。現在は札幌商科大学人文学部人類学資料室蔵であり、近々資料紹介する予定である。

註.3　宮塚義人氏の御教示によれば、本遺跡から２点出土し、うち１点は完形，もう１点は欠損品であり、いずれも住居址覆土から出土したという。報告書は近々刊行予定である。

註.4　石附喜三男先生の御教示によれば、本遺跡

PL.2　鞴の羽口出土状況現場の写真

PL. 3　鞴の羽口の出土したピット

PL. 4　十勝太古川遺跡第８号竪穴

調査の際２点出土し、うち１点は住居址覆土から出土した次損品であり、もう１点は住居址外から出土した小破片であるという。報告書は未刊，札幌大学文化交流研究所蔵。

註.５　斉藤　傑氏の御教示によれば、本遺跡では今のところ６点出土したという。いずれも遺構外から出土し、無文である。報告書は明年刊行予定。

参　考　文　献

宇田川　洋　1981　「擦文文化の遺跡」『北見市史　上巻』

浦幌町教育委員会　1973　『十勝太古川・若月遺跡発掘調査概報－第１次発掘調査－』

大谷敏三・田村俊之ほか　1982　『末広遺跡における考古学的調査（下）』　千歳市教育委員会

大沼忠春　1979　「北海道中央部の擦文文化」『どるめん』*No.* 22　JICC出版局

大沼忠春・佐藤隆広・江差高校考古学部　1976　「江差町厚沢部川河口遺跡の採集資料」『桧山考古学研究会々誌』５

大沼忠春・大沼あさ子　1977　「元和８遺跡の調査」　『元和』（続）　乙部町教育委員会

大場利夫・大井晴男編　1976・81　『香深井遺跡（上）・（下）』（オホーツク文化の研究　Ⅱ・Ⅲ）　東京大学出版会

小平町教育委員会　1981　「小平町高砂遺跡」『北海道考古学会だより』第12号

金盛典夫・村田良介・松田美砂子　1981　「須藤遺跡」　『斜里町文化財調査報告』Ⅰ

菊池徹夫　1979　「擦文文化の鉄器について」『どるめん』*No.* 22　JICC出版局

桜井清彦　1958　「北海道奥尻島青苗貝塚について（第１次調査概報），『古代』　27　早稲田大学考古学会

佐藤隆広　1980　『ホロナイポ遺跡』　枝幸町教育委員会

佐藤隆広　1981　『ホロナイポ遺跡　Ⅱ』　枝幸町教育委員会

佐藤忠雄　1979　「北海道西南部の擦文文化」『どるめん』*No.* 22　JICC出版局

佐藤忠雄・山田　忍　1978　『青苗遺跡発掘調査概報　奥尻町教育委員会

高畑宜一　1894　「石狩川沿岸穴居人種遺跡」『東京人類学会雑誌』　10－103

藤本　強　1982　『擦文文化』教育社

藤本　強・宇田川　洋・武田　修　1982　『岐阜第二遺跡』常呂町

八幡一郎ほか　1966　「西月ケ岡遺跡」　『北海道根室の先史遺跡』根室市

吉崎昌一　1974　『北海道のヒト』北海道新聞社

浦幌町郷土博物館報告総目次

――創刊号～第19号――

浦幌町郷土博物館

題　　名		号	ページ
〈序・あいさつ・巻頭言〉			
『浦幌町郷土博物館報告』発刊のことば	野沢　貞男	1	2
年頭所感	野沢　貞男	6	1
年頭所感	家村　克行	7	1
文化財保護の一断層	石橋　次雄	9	2
郷土博物館探訪	井下まさの	10	2
先人の精神文化を伝えるものに	本間　道男	16	2
開館10周年を迎えて	家村　克行	16	3
〈博物館〉			
浦幌町郷土博物館の資料と分類基準について	後藤　秀彦	1	3～4
80年代での浦幌町郷土博物館の振興	大井　康行	16	3～5